

日蓮大聖人御書全集

ひょうえのさかんどのごへんじ

兵衛志殿御返事

かまたりぞうぶつ こと

(鎌足造仏の事)

新版
1483
〜
1484

ひょうえのさかんどのごへんじ かまたりぞうぶつ こと

兵衛志殿御返事 (鎌足造仏の事)

けんじ ねん がつ にち

建治3年(77) 8月21日 56歳 池上宗長

がもくにかんもん むさしぼうえんにち つか た そうら お

鵜目二貫文、武蔵房円日を使いにて、給び候了わんぬ。

にんのうさんじゅうろくだいこうぎよくてんのう もう おう によにん

人王三十六代皇極天皇と申せし王は女人にておわしき。

とき いるかのとみ もう もの

その時、入鹿臣と申す者あり。あまりのおごりのものぐるわ

おうい 奪 振 舞

しさに、王位をうばわんとふるまいしを、天皇・王子等、

ふしぎ 思 ちからおよ

不思議とはおぼせしかども、いかにも力及ばざりしほどに、

おおえのおうじ かるのおうじとう 歎 たま なかとみのかまこ もう しん

大兄王子・軽王子等なげかせ給いて、中臣鎌子と申せし臣

もう たま しんもう

に申しあわせさせ給いしかば、臣申さく「いかにも人力は

じんりき

叶

見

そつら

うまこ

れい

きようしゅ

かなうべしとはみえ候わず。馬子が例をひきて「教主

しやくそん おんちから

かな

もう

積尊の御力ならずば叶いがたし」と申せしかば、さらば

しやくそん

つく

たてまつ

祈

いるか

とて、積尊を造り奉つていのりしかば、入鹿ほどなく打

なかとみのかまこ

もう

ひと

のち

かばね変

ふじわらの

たれにき。この中臣鎌子と申す人は、後には姓かえて藤原

かまたり

もう

うちのおとど

たいしよつかん

もう

ひと

いま

いち

ひと

鎌足と申し、内大臣になり、大織冠と申す人、今の一の人

ごせんぞ

しやかぶつ

いま

こうふくじ

ほんぞん

の御先祖なり。この釈迦仏は、今、興福寺の本尊なり。

おう

おう

しやかぶつ

しん

しん

しやかぶつ

しんこく

されば、王の王たるも釈迦仏、臣の臣たるも釈迦仏、神国

ぶつこく

右衛門

大

夫どの

おんふみ

ひ

あ

の仏国となりしこと、えもんのたゆう殿の御文と引き合わ

こころ得

たま

いま

よ

たこく

奪

せて心えさせ給え。今の代は他国にうばわれんとすること、

しやくそん 忽 ゆえ かみ ちから およ
釈尊をいるかせにする故なり、神の力も及ぶべからずと

もう
申すはこれなり。

おのおのふたり

各々二人は、すでにところそ人はみしかども、かくいみじ

見

たも

ひと 見

しやかぶつ ほけきよう

おんちから

くみえさせ給うは、ひとえに釈迦仏・法華経の御力なりと

思

思

そうろう

ごしよう

頼

もう

おぼすらん。またこれにもおもい候。後生のたのもしさ申

すばかりなし。

のち

これより後も、いかなることありとも、すこしもたゆむこ

弛

張

上

責

となかれ。いよいよはりあげてせむべし。たとい命に及ぶ

いのち

およ

怯

とも、すこしもひるむことなかれ。あなかしこ、あなかしこ。

きようきようきんげん

恐々謹言。

はちがつにじゅういちにち

八月二十一日

ひようえのさかんどのごへんじ

兵衛志殿御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押